

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04242

研究課題名(和文) 高次脳機能障害者の社会参加を促進する教育用VTRの作成とその効果

研究課題名(英文) Effect of the VTR for education to promote the social participation of the cognitive disorders caused by acquired brain injuries

研究代表者

會田 玉美 (AIDA, Tamami)

目白大学・保健医療学部・教授

研究者番号：60406569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：高次脳機能障害者の社会参加を促進するためには、高次脳機能障害者とその家族および支援者の高次脳機能障害に対する理解を向上させ、医療福祉連携を促進することが必要である。本研究では教育用動画を作成し、その効果を検討した。動画の作成に先行して、高次脳機能障害者と家族の障害の自覚、専門職から受けた説明、困りごとの変化、有益だった支援について東京高次脳機能障害協議会会員を対象に質問紙調査を行った。その結果を踏まえ、高次脳機能障害者の教育用動画を作成した。出演者は高次脳機能障害者当事者および支援者に協力を得た。医療機関に通う高次脳機能障害者と家族に動画の視聴と視聴前後のアンケートを実施し、効果を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高次脳機能障害者と家族の障害の自覚、困りごとの変化、有益な支援について、高次脳機能障害者と家族の傾向や違いが明らかになった。また自由記述回答から社会参加の障壁として制度のわかりにくさが指摘されており、支援の制度をわかりやすくすることが喫緊の課題と考えられる。本研究で作成された教育用動画「高次脳機能障害者の社会参加を促進するために」を病院、自立訓練施設、就労サービス事業所、相談支援事業所など、多くの支援の場所で当事者家族の教育、支援者の教育、地域生活支援に広く活用することにより、高次脳機能障害者の社会参加を促進できると考えられる。https://youtu.be/9RBeZ_AQuCo

研究成果の概要(英文)：We made an educational video to promote awareness of cognitive impairment due to acquired brain injury (ABI) and to foster social participation amongst those with this condition; we then considered the effects of the video. First, we gave the Tokyo Higher Brain Dysfunction Council a survey with questions regarding awareness, professional insights, difficulties faced by those with cognitive impairment, and helpful resources. Using the results of the survey, we created a video explaining cognitive impairment due to ABI, methods of dealing with the condition, and ways of seeking support. The actors in the video were real people with cognitive impairment and members of their support system. We then considered the effects of the video at medical institutions, Tokyo Higher Brain Function Association member organizations, and independent and functional training facilities.

研究分野：地域リハビリテーション

キーワード：高次脳機能障害 医療福祉連携 地域リハビリテーション 社会参加 障害者福祉

1. 研究開始当初の背景

わが国では、多彩な行動障害を有する高次脳機能障害者への行政サービスは遅れ、2011年よりようやく脳損傷者の日常生活・社会生活の障害に対するリハビリテーションや社会的支援への取り組みが始まった。現在は高次脳機能障害者に特化した生活支援や復職・就労支援の取り組みができる支援機関および自立支援協議会の高次脳機能障害部会や患者家族会の発足なども増加しており、高次脳機能障害の認識度は向上したと考えられる。しかし、高次脳機能障害者は未だにこのような支援や制度を有効に活用出来ていないといえない。筆者は東京都板橋区の地域自立支援協議会高次脳機能障害部会長として活動する中で、高次脳機能障害者の医療福祉連携の進展は思うように進んでいない印象がある。高次脳機能障害は当事者、家族はもとより、支援者にもわかりにくい障害であるとされている。医療の支援者は障害福祉サービスへの理解が不十分であり、福祉の支援者は高次脳機能障害に対する理解が低く、当事者・家族は障害を医学的問題ととらえ、医療サービスに固執する傾向にある(図1)。医療の支援者には「高次脳機能障害者の医療福祉連携を促進する職業リハビリテーション計画書(平成26-28年 Grant Number JP 2638766)」を作成し、その効果を検討した。本研究では医療福祉連携の焦点を高次脳機能障害者とその家族に設定した。高次脳機能障害者は、障害を周囲に理解されない孤立感だけでなく、解決すべき課題の焦点がずれることにより、サービスを受ける機会を失い、仕事を通じて得られる対価や人間関係、および働く喜びを得られないことは、人生における大きな損失である。また社会においても障害者雇用や包括的社会の実現にマイナスの作用が大きいと考えられる。

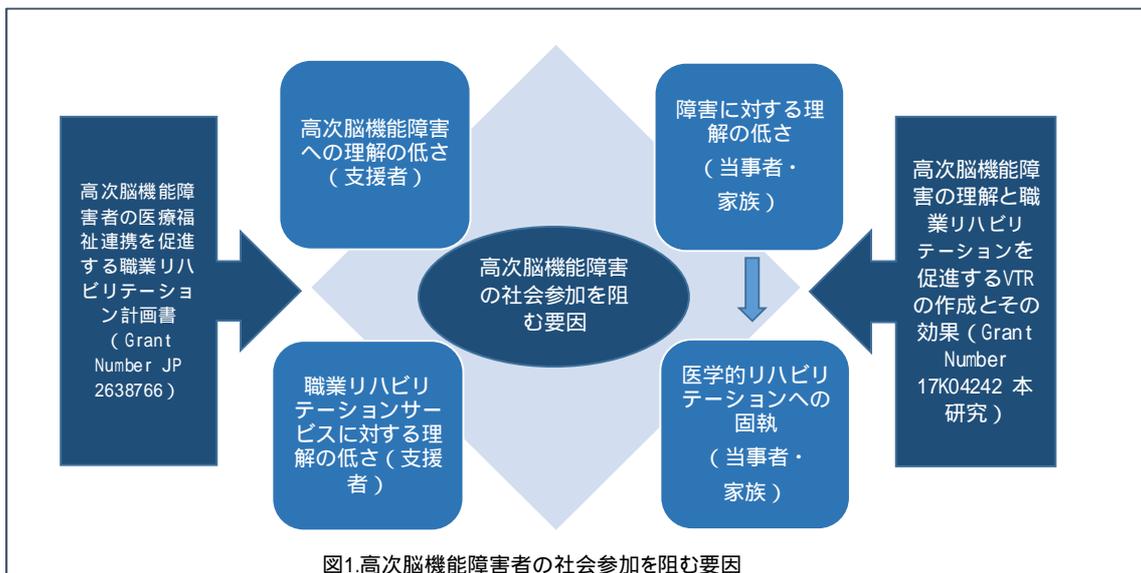


図1.高次脳機能障害者の社会参加を阻む要因

2. 研究の目的

本研究の目的は、高次脳機能障害者とその家族および支援者が高次脳機能障害を理解し、円滑に地域生活支援および就労サービスに移行し、社会参加へとすすむことを目的とした教育用動画を作成し、動画の視聴による高次脳機能障害者および家族の障害の自覚への効果を検討する。映像の完成後はホームページなどで広く公表し、高次脳機能障害者および支援者、社会における高次脳機能障害の理解向上に役立てることを目的とした。

3. 研究の方法

1) 高次脳機能障害者とその家族の障害に対する自覚の特徴に関する調査

動画の作成にあたり、高次脳機能障害者とその家族の障害に対する自覚の特徴を明らかにするために、東京高次脳機能協議会(TKK)に所属する高次脳機能障害者とその家族にアンケート調査を実施した。調査項目は基本的な属性、社会参加状況、高次脳機能障害の診断(開示のタイミング、理解、その後の障害の自己認識)、社会的つながり、入院中と退院後の問題、および障害を理解するのに役立つと思われるサービスであった。統計分析には、基本的な記述統計、スピアマン相関分析、クラスカル・ウォリスH検定、マン・ホイットニー-U検定、および2検定を使用した(IBM SPSS Statistics for Japan 24)。自由記述解答にはベレルソンの内容分析を用いた。

2) 動画の作成と高次脳機能障害者及びその家族に対する動画の効果

高次脳機能障害者やその家族、支援者の障害に対する理解を深めることにより、社会参加を促進するために15分間の教育用ビデオを作成し、その効果を検討した。動画は、高次脳機能障害とは何か、その原因と症状、障害の自覚が持ちにくい理由、高次脳機能障害を自覚したタイミング、困りごとの変化、代表的な高次脳機能障害とその対処法について、役に立ったサービス、支援の求め方について、高次脳機能障害者とその家族の障害に対する自覚の特徴に関する調査の結果を引用して15分間に構成した。高次脳機能障害者のリハビリテーションに経験の豊富な作



図 2. 教育用動画「高次脳機能障害者の社会参加を促進するために」

業療法士 2 名, 高次脳機能障害の就労サービスに携わる支援者 1 名, および東京都心身障害者福祉センター高次脳機能障害担当者に動画のコンテンツとセリフの校正を依頼した。出演者には高次脳機能障害者および職員役には板橋区内の地域活動支援センター, 就労継続支援 B 型事業所, 区立障害者福祉センターの障害当事者および職員に依頼, 協力を得た。撮影および音声と動画の編集は医学映像教育センターに委託した(図 2)。

次に, 本動画の高次脳機能障害者と家族の障害の自覚に対する効果を調査するために, 板橋区高次脳機能障害部会に所属する 5 病院のリハビリテーション部門に協力を依頼した。調査内容は, 65 歳以下の入院中, 外来あるいは通院中の高次脳機能障害者と家族に動画「高次脳機能障害がい者社会参加を促進するために」(15 分)の視聴とその前後に 2 回アンケートによるアンケートの実施をするものである。動画の視聴およびアンケートへの回答は, 筆者よりタブレット, ポケット WIFI を貸出して実施した。研究協力施設の作業療法士ないしは言語聴覚士にはあらかじめ割り当てた病院番号と対象者の整理番号、高次脳機能障害の原因疾患, 障害, 発症からの期間を入力してもらった。対象者は質問の回答が可能であり, 付き添い者およびセラピストの代理入力を可とした。統計解析は, 単純集計, クロス集計, 対応のある比較検定, 自由記述データは質的内容分析を用いる。

作成された動画は広く公開し, 高次脳機能障害者の医療福祉連携の促進に役立てる。

4. 研究成果

1) 高次脳機能障害者とその家族の障害に対する自覚の特徴に関する調査

197 人(106 人の高次脳機能障害者, 91 人の家族, 60.2%の回収率)より有効な回答が得られた。高次脳機能障害者の 71%が労働年齢(18-65 歳)にあり, 15%が就業中であった。社会的つながり感の高次脳機能障害者の 74%と家族の 86%に見られ, 高次脳機能障害者と家族の間には差があり, 高次脳機能障害者の社会的つながり感は雇用状況と相関していた($P=.04$)。高次脳機能障害があると感じたタイミングは, 高次脳機能障害者は入院中 31%退院後 25%(図 3), 家族は入院中 67%, 退院後は 15%と有意差がみられた($P=.00$)。高次脳機能障害者の 35%と家族の 60%は専門家による障害の説明により障害を理解したと回答した。高次脳機能障害者と家族は双方とも入院中と比較して退院後に優位に多くの困りごとがあり, (高次脳機能障害者 $P=.04$, 家族 $P=.03$), 困りごとは基本的な日常生活活動から応用的生活活動に移行していた(図 4, 図

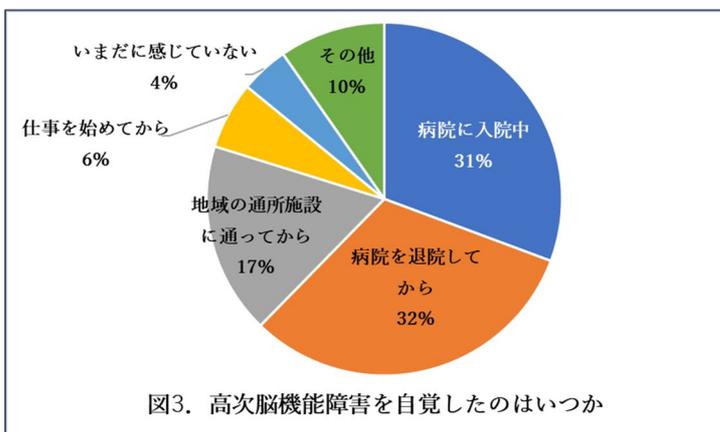


図3. 高次脳機能障害を自覚したのはいつか

5)。多数の高次脳機能障害者と家族は障害の自覚を高めるための有用なサービスとして通所施設をあげていた(図 6)。高次脳機能障害者と家族には入院後できるだけ早く高次脳機能障害の状態について教育することにより, 退院後の困難に適応するために地域のサービスを受けることができ, コミュニティへの参加が促進され, 社会とのつながり感も増加すると考えられた。自由記述回答を内容分析した結果, 全記録単位は 231 単位, そのうち<困難を感じる障害>(< > はカテゴリー)

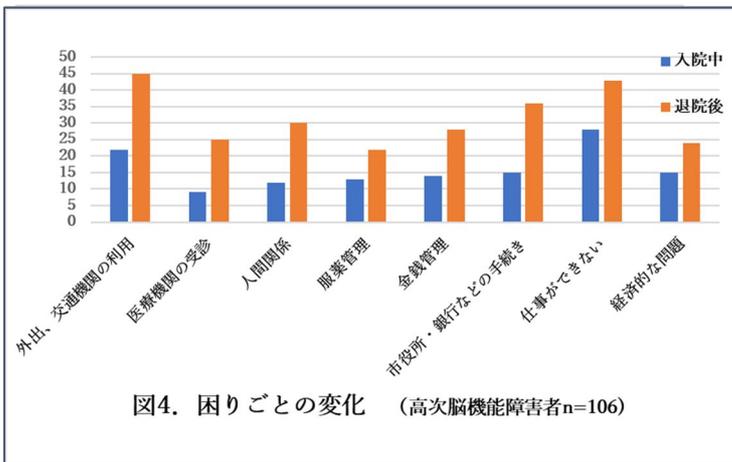


図4. 困りごとの変化 (高次脳機能障害者n=106)

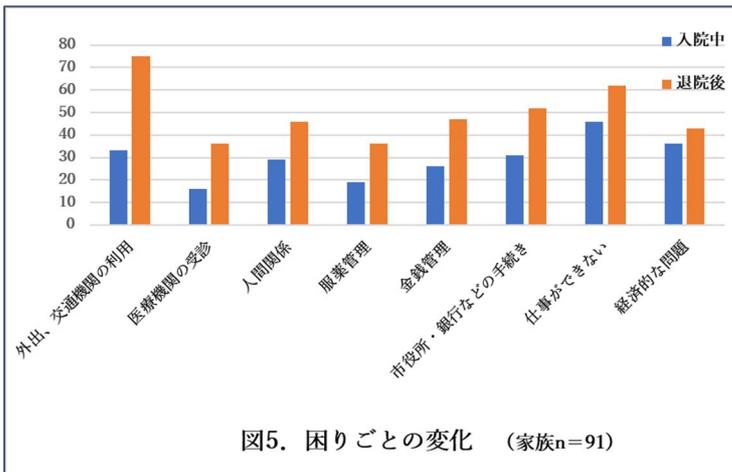


図5. 困りごとの変化 (家族n=91)

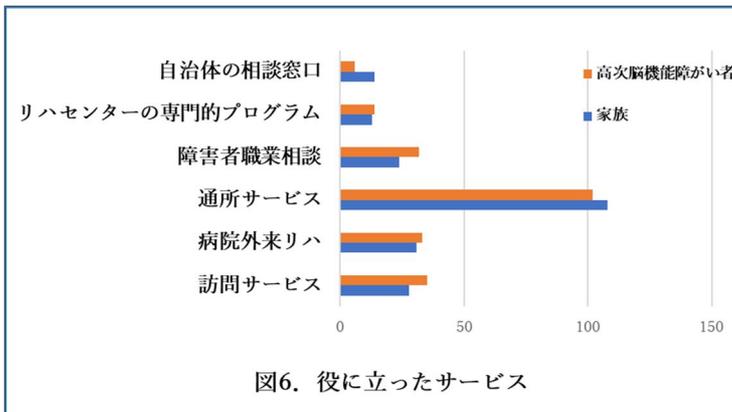


図6. 役に立ったサービス

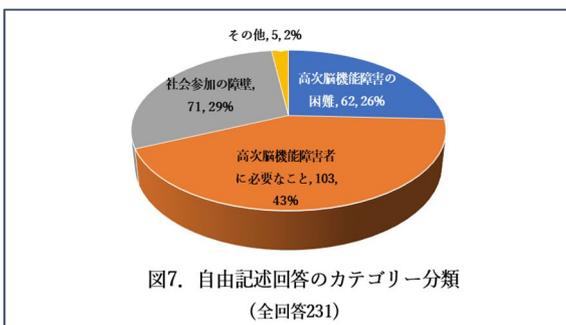


図7. 自由記述回答の 카테고리分類 (全回答231)

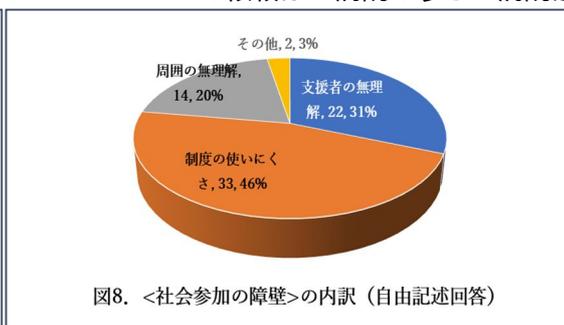


図8. <社会参加の障壁>の内訳 (自由記述回答)

は 67 記録単位 (29.0%)、高次脳機能障害者の<社会参加のための障壁>は 63 件 (27.3%)、<必要と思われる支援>は 101 件 (43.7%) に分類された(図7)。困難を感じる障害は障害の自覚が困難 15 件、感情抑制障害 7 件、社会的行動障害 5 件があげられた。社会参加のための障壁は支援者の無理解 22 件 (31%)、制度の使いにくさ 33 件 (46%)、周囲の無理解 8 件 (20%) があげられていた(図8)。必要と思われる支援には家族会 25 件、専門のサービス 25 件、講演会 6 件などがあげられていた²⁾。社会参加のために障壁には<制度の使いにくさ>が最も多く指摘されていることは改善を要する喫緊の課題と考えられる。また退院後の困難に備えるために早期から IADL の能力を向上させること、障害から生じる困難に対応すること、支援者の理解を向上させること、認知障害に特化した社会福祉サービスを増設すること、家族会のサポートをすることなどが有効と考えられる。

2) 高次脳機能障害者及びその家族に対する動画の効果

調査期間は 2020 年 3 月 1 日より 3 病院のリハビリテーション科にて開始した。65 歳以下の入院中、外来あるいは通院中の高次脳機能障害者と家族に動画「高次脳機能障がい者社会参加を促進するために」(15 分)の視聴とその前後に 2 回自記式のアンケートの実施をするものであったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のため、調査協力の依頼は 5 病院のうち 3 病院か

ら得られた。2 病院からは新型コロナウイルス感染防止対策のため面会および診療や部外者の立ち入りを制限するために研究協力期間を延期したいとの申し出があった。研究協力が得られた 3 病院でも新型コロナウイルス感染症病床拡大のため、病床稼働率の制限と外来患者および見舞客の制限を行っているため、5 月 12 日現在有効データは 3 例であり、統計的な結果を出すには至っていない。アンケートの形式を Google フォームから質問紙形式に変更し、データ収集期間を 6 カ月程度延長して集計している。

動画は動画サイト Youtube にアップし (https://youtu.be/9RBeZ_AQuCo)、高次脳機能障害と中途障害の支援に特化した NPO 法人みんなのセンターおむすびホームページ、大学ホームページに掲載、東京都心身障害者福祉センター、板橋区障害者福祉センターに高次脳機能障害者の相

談支援時に動画の使用を依頼した。高次脳機能障害者とその家族の障害に対する自覚の特徴に関する調査に協力を依頼した東京高次脳機能障害協議会(TKK)所属団体に動画の URL を送信し、広く供覧してもらうことを依頼した。また、高次脳機能障害に関する研修会での利用として、板橋区相談支援専門支援専門員研修および練馬区中途障害者通所事業家族交流会セミナーにて動画を上映、筆者が講演を行った。

2019年3月より本教育動画を作成する過程で優れた教育用動画をホームページで配信するコロラド州デンバーのリハビリテーション専門病院である Craig Hospital の Alan H. Weintraub 博士(クレイグ病院頭部外傷プログラム部長・コロラド大学医学部臨床教授)と研究交流を継続している。本研究課題による取り組みとして 2020年1月25日、Alan H. Weintraub 博士を講師として招聘、筑波大学大学院人間総合科学研究科と共催にて「アメリカにおける頭部外傷リハビリテーションの実践と研究」を開催した。講演会には医師、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士他、高次脳機能障害の支援者およびリハビリテーション関係の研究者約30名が参加し、活発な意見交換がなされた。

筆者は板橋区地域自立支援協議会高次脳機能障害部会とかかわりが深い。今後も地域の活動を通じて、作成された動画を広く公開し、高次脳機能障害者の医療福祉連携の促進に役立てる。また、2020年には英語サブスクリプトを追加し、海外の高次脳機能障害者の支援にも役立てたいと考えている(Rehabilitation International congress 実践報告セッションに採択済み 2020年9月より2021年9月に延期)。

- 1) Tamami Aida: Support and Services Aimed at Improving Disability Self-Awareness Among Individuals with Cognitive Impairment Due to Acquired Brain Injury. International Brain Injury Association 2019, Abstract book p149
<http://ibia2019.org/wp-content/uploads/2019/04/Abstract-Book-4.5.19.pdf>
- 2) Tamami Aida, Takashi Yamada: Difficulties Experienced and Support Needed by Families of People with Cognitive Impairments due to Acquired Brain Injuries. The 4th World Disability and Rehabilitation Conference (WDRC 2019), 08th November in Bangkok, Technical session 08 Equalization of opportunities and independent living for individuals with disabilities abstract book p27

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 館岡修平, 會田玉美	4. 巻 22巻1号
2. 論文標題 脳血管障害経験後に復職したホワイトカラー職種の男性の就労継続プロセス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本作業行動研究	6. 最初と最後の頁 20,29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 會田玉美	4. 巻 171
2. 論文標題 高次脳機能障害者の職業リハビリテーションを促進するパンフレットの紹介 第23回RI世界会議報告 「Speakers' Corner」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 リハビリテーション研究	6. 最初と最後の頁 24-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Tamami Aida, Takashi Yamada
2. 発表標題 Difficulties Experienced and Support Needed by Families of People with Cognitive Impairments due to Acquired Brain Injuries.
3. 学会等名 The 4th World Disability and Rehabilitation Conference 2019 (Bangkok/ Thailand) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tamami Aida
2. 発表標題 Support and Services Aimed at Improving Disability Self-Awareness among Individuals with Cognitive Impairment Due to Acquired Brain Injury
3. 学会等名 International Brain Injury Congress 2019 (Toronto/Canada) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tamami Aida, Takashi Yamada
2. 発表標題 Awareness towards Cognitive Dysfunctions among People with Brain Injuries
3. 学会等名 3rd World Disability & Rehabilitation Conference 2018 (Kuala Lumpur/ Malaysia) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tamami Aida, Takashi Yamada
2. 発表標題 Effect of medical welfare cooperation of "Vocational Rehabilitation Planning Sheet for People with Cognitive Disorders after Acquired Brain Injury"
3. 学会等名 10th World Congress for Neurorehabilitation (Powai, Mumbai, India) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tamami Aida
2. 発表標題 An attempt to facilitate support for vulnerable populations during disasters through partnership with support groups for disabled individuals
3. 学会等名 World Federation Occupational Therapy Congress 2018 (Cape Town/ South Africa) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 館岡周平, 會田玉美
2. 発表標題 脳梗塞を経験した調理人の復職
3. 学会等名 平成29年度 第14回 東京都作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tamami Aida
2. 発表標題 Effect of medical welfare cooperation of "Vocational rehabilitation planning sheet for persons with cognitive disorders after acquired brain injury"
3. 学会等名 UIC Scholarship of Practice (SOP) Lecture Series (Chicago/ USA) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 會田玉美
2. 発表標題 高次脳機能障害者の社会参加を促進するために
3. 学会等名 第26回埼玉県作業療法士学会 さいたま市/埼玉県 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p><招聘> Dr. Alan Weintraub氏「アメリカにおける頭部外傷リハビリテーションの実践と研究」會田玉美 科学研究費助成金基盤研究(C)高次脳機能障害者の社会参加を促進する教育用VTRの作成とその効果、筑波大学人間総合科学研究科戦略プロジェクト共催 2020年1月26日筑波大学文京校舎・東京</p> <p><講演></p> <p>會田玉美：高次脳機能障害者学習会・家族交流会「地域での生活、就労と社会参加について」2020年2月18日 中村橋福祉ケアセンター，東京</p> <p>會田玉美：令和元年度さいたま市障がい者社会参加推進家族教室事業 高次脳障害者ナノさいたま当事者・家族会「高次脳機能障害者の社会参加」（さいたま市主催、目白大学共催）2020年1月11日浦和コミュニティセンター，埼玉</p> <p>會田玉美：板橋区相談支援事業所実務担当者連絡会「高次脳機能障害について」2020年2月12日 板橋区役所，東京</p> <p>會田玉美：地域での生活、就労と社会参加について・練馬区中途障害者通所事業（中村橋福祉ケアセンターだんだん）家族交流会・セミナー，2019年3月20日・中村橋福祉ケアセンター，東京</p> <p>會田玉美：高次脳機能障がいとのつきあい方を考える・第125回いたばしボランティア・市民活動フォーラム，2019年3月10日・板橋区仲宿地域センター，東京</p> <p>會田玉美：「希望」に寄り添う支援～支援のポイントと多職種連携～・平成30年度第2回豊島区高次脳機能障害者講演会，2019年1月25日・豊島区保健福祉部障害福祉課豊島区立心身障害者福祉センター，東京</p> <p>會田玉美：高次脳機能障がい者の社会参加促進のために・東京都区西北部地域リハビリテーション支援センター講演会，2018年11月16日・東京都保健医療公社豊島病院，東京</p> <p>會田玉美：「高次脳機能障がい者の社会参加を促進するために」練馬区中途障害者通所事業，家族交流会セミナー講演 2018年3月14日，中村橋区民センター，東京</p> <p>會田玉美：「高次脳機能障がい者の社会参加を促進するために」レインボ 町田 定期交流会 講演 2018年2月28日，町田市民フォーラム，東京</p> <p>會田玉美：「高次脳機能障害者の社会参加を促進するために」平成28年度公益財団法人東京都保健医療公社荏原病院 高次脳機能障害支援普及事業「専門的リハビリテーションの充実事業」2017年10月25日，東京都保健医療公社荏原病院，東京</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山田 孝 (YAMADA Takashi)	目白大学・保健医療学部・客員研究員	
	(70158202)	(32414)	